雪の翼

泉鏡花

青空文庫

柏崎海軍少尉の夫人に、民子といつて、一昨年故郷なる、福井で結婚の式をあげて、佐世保に移住んだのが、今度少尉が出征に就き、親里の福井に歸り、神佛を祈り、影膳据ゑつつ座にある如く、家を守つて居るのがあつた。

旅順の吉報傳はるとともに幾千の猛將勇士、或は士卒――或は傷つき骨も皮も散々に、影も留めぬさへある中に夫は天晴の功名して、唯纔に左の手に微傷を受けたばかりと聞いた時、且つ其の乘組んだ艦の帆柱に、夕陽の光を浴びて、一羽雪の如き鷹の來り留つた報を受け取つた時、連添ふ身の民子は如何に感じたらう。あはれ新婚の式を擧げて、一年の衾暖かならず、戰地に向つて出立つた折には、忍んで泣かなかつたのも、嬉涙に暮れたのであつた。

あゝ、其のよろこびの涙も、夜は片敷いて帶も解かぬ留守の袖に乾きもあへず、飛報は鎭守府の病院より、一家の魂を消しに來た。

少尉が病んで、豫後不良とのことである。

此の急信は××年××月××日、午後三時に屆いたので、民子は蒼くなつて衝と立つと、不斷着に繻子の帶引緊めて、つか〳〵と玄關へ。父親が佛壇に御明を點ずる間に、母親は、財布の紐を結へながら、駈けて出て之を懷中に入れさせる、女中がショオルをきせかける、隣の女房が、急いで腕車を仕立に行く、とかうする內、お供に立つべき與曾平といふ親仁、身支度をするといふ始末。さて、取るものも取りあへず福井の市を出發した。これが鎭守府の病

院に、夫を見舞ふ首途であつた。

冬の日の、山國の、名にしおふ越路なり、其日は空も曇りたれば、漸く町をはづれると、九頭龍川の川面に、早や夕暮の色を籠めて、暗くなりゆく水蒼く、早瀬颪れて鳴る音も、千々に碎けて立つ波も、雪や！其の雪の思ひ遣らるゝ空模様。近江の國へ山越に、出づるまでには、中の河内、木の芽峠が、尤も近きは目の前に、春日野峠を控へたれば、頂の雲眉を蔽うて、道のほど五里あまり、武生の宿に着いた頃、日はとつぷりと暮れ果てた。

長旅は抱へたり、前に峠を望んだれば、夜を籠めてなど思ひも寄らず、柳屋といふに宿を取る。

路すがら手も足も冷え凍り、火鉢の上へ突伏しても、身ぶるひやまぬ寒さであつたが、枕に就いて初夜過ぐる頃ほひより、少し氣候がゆるんだと思ふと、凡そ手掌ほどあらうといふ、俗に牡丹となづくる雪が、しと〳〵と果しもあらず降出して、夜中頃には武生の町を笠のやうに押被せた、御嶽といふ一座の峰、根こそぎ一揺れ、揺れたかと思ふ氣勢がして、風さへ颯と吹き添つた。

一の谷、二の谷、三の谷、四の谷かけて、山々峰々縦横に、荒れに荒るゝが手に取るやう、大波の寄せては返すに齊しく、此の一夜に北國空にあらゆる雪を、震ひ落すこと、凄まじい。

民子は一炊の夢も結ばず。あけ方に風は凪いだ。

昨夜雇つた腕車が二臺、雪の門を叩いたので、主從は、朝餉の支度も※々に、身ごしらへし

て、戸外に出ると、東雲の色とも分かず黄昏の空とも見えず、溟々濛々として、天地唯一白。

不意に積つた雪なれば、雪車と申しても間に合ず、ともかくもお輦。帳場から此處へ參る内も、此の通りの大汗と、四人の車夫は口を揃へ、精一杯、後押で、お供はいたして見まするけれども、前途のお請合はいたされず。何はしかれ車の齒の埋まりますまで、遣るとしませう。其上は、三人がかり五人がかり、三井寺の鐘をかつぐ力づくでは、とても一寸も動きはしませぬ。お約束なれば當柳屋の顏立に參つたまで、と、しり込すること一方ならず。唯急ぎに急がれて、こゝに心なき主從よりも、御機嫌ようと門に立つて、一曳ひけば降る雪に、母衣の形も早や隱れて、殿々として沈み行く客を見送る宿のものが、却つて心細い限りであつた。

酒代は惜まぬ客人なり、然も美人を載せたれば、屈竟の壯佼勇をなし、曳々聲を懸け合はせ、畷、畦道、村の徑、揉みに揉んで、三里の路に八九時間、正午といふのに、峠の麓、春日野村に着いたので、先づ一軒の茶店に休んで、一行は吻と呼吸。

茶店のものも爐を圍んで、ぼんやりとして居るばかり。いふまでもなく極月かけて三月彼岸の雪どけまでは、毎年こんな中に起伏するから、雪を驚くやうな者は忘れても無い土地柄ながら、今年は意外に早い上に、今時恁くまで積るべしとは、七八十になつた老人も思ひ懸ないのであつたと謂ふから。

來る道でも、村を抜けて、藪の前など通る折は、兩側から倒れ伏して、竹も三尺の雪を被いで、或は五間、或は十間、恰も眞綿の隧道のやうであつたを、手で拂ひ笠で拂ひ、辛うじて

腕車を潜らしたれば、網の目にかゝつたやうに、彼方此方を、雀がばら〳〵、洞に蝙蝠の居るやうだつた、と車夫同士語りなどして、しばらく澁茶に市が榮える。

聲の中に噫と一聲、床几から轉げ落ちさう、脾腹を抱へて呻いたのは、民子が供の與曾平親仁。

這は便なし、心を冷した老の癪、其の惱輕からず。

一體誰彼といふ中に、さし急いだ旅なれば、註文は間に合ず、殊に少い婦人なり。うつかりしたものも連れられねば、供さして遣られもせぬ。與曾平は、三十年餘りも律儀に事へて、飼殺のやうにして置く者の氣質は知れたり、今の世の道中に、雲助、白波の恐れなんど、あるべくも思はれねば、力はなくても怪しうはあらず、最も便よきは年こそ取つたれ、大根も引く、屋根も葺く、水も汲めば米も搗く、達者なればと、この老僕を擇んだのが、大なる過失になつた。

いかに息災でも既に五十九、あけて六十にならうといふのが、内でこそはくる〳〵※れ、近頃は遠路の要もなく、父親が本を見る、炬燵の端を拜借し、母親が看經するうしろから、如來樣を拜む身分、血の氣の少ないのか、とやかくと、心遣ひに胸を騷がせ、寒さに骨を冷したれば、忘れて居た持病がこゝで、生憎此時。

雪は小止もなく降るのである、見る〳〵内に積るのである。

大勢が寄つて集り、民子は取縋るやうにして、介抱するにも、藥にも、ありあはせの熊膽位、

其でも心は通じたか、少しは落着いたから一刻も疾くと、再び腕車を立てようとすれば、泥除に噛りつくまでもなく、與曾平は腰を折つて、礎と倒れて、顔の色も次第に變り、之では却つて足手絡ひ、一式の御恩報じ、此のお供をと想ひましたに、最う叶はぬ、皆で首を縊めてくれ、奥様私を刺殺して、お心懸のないやうに願ひまする。おのれやれ、死んで鬼となり、無事に道中はさせませう、魂が附添つて、と血狂ふばかりに急るほど、弱るは老の身體にこそ。

口々に押宥め、民子も切に慰めて、お前の病氣を看護ると謂つて此處に足は留められぬ。棄てゝ行くには忍びぬけれども、鎭守府の旦那様が、呼吸のある内一目逢ひたい、私の心は察しておくれ、とかういふ間も心は急く、峠は前に控へて居るし、爺や！

もし奥様。

と土間の端までゐざり出でて、膝をついて、手を合すのを、振返つて、母衣は下りた。

一臺の腕車二人の車夫は、此の茶店に留まつて、人々とともに手當をし、些とでもあがきが着いたら、早速武生までも其日の内に引返すことにしたのである。

民子の腕車も二人がかり、それから三里半だら〳〵のぼりに、中空に聳えたる、春日野峠にさしかゝる。

ものの半道とは上らないのに、車の歯の軋り強く、平地でさへ、分けて坂、一分間に一寸づゝ、次第に雪が嵩増すので、呼吸を切つても、もがいても、腕車は一歩も進まずなりぬ。

前なるは梶棒を下して坐り、後なるは尻餅ついて、御新造さん、とてもと謂ふ。

大方は恁くあらむと、期したることとて、民子も豫め覺悟したから、茶店で草鞋を穿いて來たので、此處で母衣から姿を顯し、山路の雪に下立つと、早や其の爪先は白うなる。

下坂は、動が取れると、一名の車夫は空車を曳いて、直ぐに引返す事になり、梶棒を取つて居たのが、旅鞄を一個背負つて、之が路案内で峠まで供をすることになつた。

其の鐵の如き健脚も、雪を踏んではとぼ〳〵しながら、前へ立つて足あとを印して上る、民子はあとから傍目も觸らず、攀ぢ上る心細さ。

千山萬岳疊々と、北に走り、西に分れ、南より迫り、東より襲ふ四圍たゞ高き白妙なり。

さるほどに、山又山、上れば峰は益累り、頂は愈々聳えて、見渡せば、見渡せば、此處はかり日の本を、雪が封ずる光景かな。

幸に風が無く、雪路に譬ひ山中でも、然までには寒くない、踏みしめるに力の入るだけ、却つて汗するばかりであつたが、裾も袂も硬ばるやうに、ぞつと寒さが身に迫ると、山々の影がさして、忽ち暮なむとする景色。あはよく峠に戸を鎖した一軒の山家の軒に辿り着いた。

さて奥様、目當にいたして參つたは此の小家、怜は武生に勞働に行つて居り、留守は山の主のやうな、爺と婆二人ぐらし、此處にお泊りとなさいまし、戸を叩いてあけさせませう。また彼方此方五六軒立場茶屋もござりますが、美しい貴女さま、唯お一人、預けまして、安心なは、此の外にござりませぬ。武生の富藏が受合ひました、何にしろお泊んなすつて、今夜の様子を御覽じまし。此の雪の止むか止まぬかが勝負でござります。もし留みませぬと、迚も路は通じ

ません、降やんでくれさへすれば、雪車の出ます便宜もあります、御存じでもありませうが、此の邊では、雪籠といつて、山の中で一夜の内に、不意に雪に會ひまするとと、時節の來るまで何方へも出られぬことになりますから、私は稼人、家に四五人も抱へて居ります、萬に一つも、もし、然やうな目に逢ひまするとと、嬶々や小兒が※を釣らねばなりませぬで、此の上お供は出來かねまする。お別れといたしまして、其處らの茶店をあけさせて、茶碗酒をぎうとあふり、其の勢で、暗雲に、とんぼを切つて轉げるまでも、今日の内に麓まで歸ります、とこれから雪の伏家を叩くと、老人夫婦が出迎へて、富藏に仔細を聞くと、お可哀相のいひつゞけ。

行先が案じられて、我にもあらずしよんぼりと、門に彳んで入りもやらぬ、媚しい最明寺殿を、手を採つて招じ入れて、舁据ゑるやうに圍爐裏の前。

お前まあ些と休んでと、深切にほだされて、懷しさうに民子がいふのを、いゝえ、さうしては居られませぬ、お荷物は此處へ、もし御遠慮はござりませぬ、足を投出して、裾の方からお温りなされませ、忘れても無理な路はなされますな。それぢやとつさん頼んだぜ、婆さん、いたはつて上げてくんなせい。

富藏さんとやら、といつて、民子は思はず涙ぐむ。

へい、奥さま御機嫌よう、へい、又通りがかりにも、お供の御病人に氣をつけます。あゝ、いかい難儀をして、おいでなさるさきの旦那樣も御大病さうな、唯の時なら橋の上も、欄干の方は避けてお通りなさらうのに、おいたはしい。お天道樣、何分お頼み申しますぜ、やあお天

道様といや降ることは〳〵。

あとに頼むは老人夫婦、之が又、補陀落山から假にこゝへ、庵を結んで、南無大悲民子のために觀世音。

其の情で、饑ゑず、凍えず、然も安心して寢床に入ることが出來た。

佗しさは、食べるものも、着るものも、こゝに斷るまでもない、薄い蒲團も、眞心には暖く、殊に些は便りにならうと、故と佛間の佛壇の前に、枕を置いてくれたのである。

心靜に枕には就いたが、民子は何うして眠られよう、晝の疲勞を覺ゆるにつけても、思ひ遣らるゝ後の旅。

更け行く閨に聲もなく、涼しい目ばかりぱち〳〵させて、鐘の音も聞えぬのを、徒に指を折る、寂々とした板戸の外に、ばさりと物音。

民子は樹を辷つた雪のかたまりであらうと思つた。

しばらくして又ばさりと障つた、恁る時、恁る山家に雪の夜半、此の音に恐氣だつた、婦人氣はどんなであらう。

富藏は疑はないでも、老夫婦の心は分つて居ても、孤家である、この孤家なる言は、昔語にも、お伽話にも、淨瑠璃にも、ものの本にも、年紀今年二十になるまで、民子の耳に入つた響きに、一ツとして、悲慘悽愴の趣を今爰に囁き告ぐる、材料でないのはない。

呼吸を詰めて、なほ鈴のやうな瞳を凝せば、薄暗い行燈の灯の外、壁も襖も天井も暗りで

ないものはなく、雪に眩めいた目には一しほで、ほのかに白いは我とわが、俤に立つ頬の邊を、確乎とおさへて枕ながら幽にわなゝく小指であつた。

あなわびし、うたてくもかゝる際に、小用がたしたくなつたのである。

もし。ふるへ聲で又、

もし〳〵と、二聲三聲呼んで見たが、目ざとい老人も寐入ばな、分けて、罪も屈託も、山も町も何にもないから、雪の夜に靜まり返つて一層寐心の好ささうに、鼾も聞えずひツそりして居る。

堪りかねて、民子は密と起き直つたが、世話になる身の遠慮深く、氣味が悪いぐらゐには家のぬし起されず、其まゝ突臥して居たけれども、さてあるべきにあらざれば、恐々行燈を引提げて、勝手は寐しなに聞いて置いた、縁側について出ようとすると、途絶えて居たのが、ばたりと當ツて、二三度續けさまにばさ、ばさ。

はツと唾をのみ、胸を反して退つたが、やがて思切つて用を達して出るまでは、まづ何事もなかつた處。

手を洗はうとする時は、民子は殺されると思つたのである。

雨戸を一枚ツト開けると、直ちに、東西南北へ五里十里の眞白な山であるから。

如何なることがあらうも知れずと、目を瞑つて、行燈をうしろに差置き、わなゝき〳〵柄杓を取つて、埋もれた雪を拂ひながら、カチリとあたる水を灌いで、投げるやうに放したトタン、

颯とばかり雪をまいて、ばつさり飛込んだ一個の怪物。

民子は思はずあツといつた。

夫婦はこれに刎起きたが、左右から民子を圍つて、三人六の目を注ぐと、小暗き方に蹲つたのは、何ものかこれ唯一羽の雁なのである。

老人は口をあいて笑ひ、いや珍しくもない、まゝあること、俄の雪に降籠められると、朋に離れ、塒に迷ひ、行方を失ひ、食に饑ゑて、却つて人に懐き寄る、これは獵師も憐んで、生命を取らず、稗、粟を與へて養ふ習と、仔細を聞けば、所謂窮鳥懐に入つたるもの。翌日も降り止まず、民子は心も心ならねど、神佛とも思はるゝ老の言に逆らはず、二日三日は宿を重ねた。

其夜の雁も立去らず、餌にかはれた飼鳥のやう、よくなつき、分けて民子に慕ひ寄つて、膳の傍に羽を休めるやうになると、はじめに生命がけ恐しく思ひしだけ、可愛さは一入なり。つれ〳〵＼には名を呼んで、翼を撫でもし、膝に抱きもし、頬もあて、夜は衾に懐を開いて、暖い玉の乳房の間に嘴を置かせて、すや〳〵と寐ることさへあつたが、一夜、凄じき寒威を覺えた。あけると凍てて雪車が出る、直に發足。

老人夫婦に別を告げつつ、民子は雁にも殘惜しいまで不便であつたなごりを惜んだ。

神の使であつたらう、この鳥がないと、民子は夫にも逢へず、其の看護も出來ず、且つやがて大尉に昇進した少尉の榮を見ることもならず、與曾平の喜顔にも、再會することが出

來なかつたのである。

民子をのせて出た雪車は、路を辿つて、十三谷といふ難所を、大切な客ばかりを千尋の谷底へ振り落した、雪ゆゑ怪我はなかつたが、落込んだのは炭焼の小屋の中。

五助。

權九郎。

といふ、兩名の炭焼が、同一雪籠に會つて封じ込められたやうになり、二日三日は貯蓄もあつたが、四日目から、粟一粒も口にしないで、熊の如き荒漢等、山狗かとばかり痩せ衰へ、目を光らせて、舌を噛んで、背中合せに倒れたまゝ、唸く聲さへ幽な處、何、人間なりとて容赦すべき。

帶を解き、衣を剥ぎ、板戸の上に縛めた、其のありさまは、こゝに謂ふまい。立處其の手足を炙るべく、炎々たる炭火を熾して、やがて、猛獸を拒ぐ用意の、山刀と斧を揮つて、あはや、其胸を開かむとなしたる處へ、神の御手の翼を擴げて、其膝、其手、其肩、其脛、狂ひまつはり、搦まつて、民子の膚を蔽うたのは、鳥ながらも心ありけむ、民子の雪車のあとを慕うて、大空を渡つて來た雁であつた。

瞬く間に、雁は炭焼に屠られたが、民子は微傷も受けないで、完き璧の泰らかに雪の膚は繩から抜けた。

渠等は敢て鬼ではない、食を得たれば人心地になつて、恰も可し、谷間から、いたはつて、

負(おぶ)つて世(よ)に出(で)た。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻六」岩波書店
　　1941（昭和16）年11月10日第1刷発行
　　1974（昭和49）年4月2日第2刷発行
入力：土屋隆
校正：門田裕志
2005年10月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の翼

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/